



TITLE:

エゴグラムからみた看護学生の自我状態の変化

AUTHOR(S):

任, 和子; 豊田, 久美子; 中井, 義勝; 菅, 佐和子

CITATION:

任, 和子 ...[et al]. エゴグラムからみた看護学生の自我状態の変化. 京都大学医療技術短期大学部紀要. 別冊, 健康人間学 1997, 9: 73-78

ISSUE DATE:

1997

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/49542>

RIGHT:

エゴグラムからみた看護学生の自我状態の変化

任 和子, 豊田久美子
中井 義勝, 菅 佐和子*

Transition of Ego States Assessed by Egogram in Nursing Students
during a Follow-up Study for Three Years

Kazuko NIN, Kumiko TOYODA,
Yoshikatsu NAKAI, Sawako SUGA*

Abstract: Transition of ego states were studied in nursing students at three occasions, i.e. the first and third grade and at the time of graduation. The subjects were 78 nursing students in our college. Ego states were assessed by the TEG, which consists of 5 sub-scales 1) CP (Critical Parent) 2) NP (Nurturing Parents) 3) A (Adult) 4) FC (Free Child) and 5) AC (Adapted Child).

The following results were obtained:

- (1) The scores of CP at the time of graduation were significantly lower than those in the first and third grade.
- (2) There was no significant difference in the scores of NP among the first and third grade and at the time of graduation.
- (3) The scores of A in the third grade tended to be lower than the first grade and at the time of graduation.
- (4) The scores of FC at the time of graduation tended to be higher than the first and third grade.
- (5) The scores of AC at the time of graduation tended to be lower than the first and third grade.

We discussed the significance of these results in nursing clinical practices.

Key words: Nursing students, Follow-up study, TEG.

はじめに

我々はこれまで、看護教育の充実を目指すうえで学生のパーソナリティをより深く理解することが必要であると考え、内田・クレペリン精神検査を用いた調査研究^{1,2)}及び、R式SE尺度と東大式エゴグラムを用いた調査研究³⁾を

行った。また、エゴグラムからみた看護学生の自我状態と実習評価との関連⁴⁾について報告した。

看護実践には、対人関係がきわめて重要である。人間理解の学習を深めるために、看護基礎教育においては、臨床実習はますます重要な位置づけとなっている。人格的にも成熟への地固

京都大学医療技術短期大学部看護学科

* 京都大学医療技術短期大学部一般教育

Division of the Science of Nursing, College of Medical Technology, Kyoto University

* Division of the General Education, College of Medical Technology, Kyoto University

1996年12月13日受付

めをする時期にある看護学生にとって、臨床実習での患者との出会いや看護婦など病院スタッフとの出会いの意味は大きく、これまでも、実習が学生の自我の状態に及ぼす影響について検討されてきた。エゴグラムを用いた看護学生の自我状態の特徴や変化については、実習前後での比較や、実習中と卒業後を比較した報告がある⁵⁻⁷⁾。しかし、看護学生を対象に、1回生の早い時期にとったエゴグラムの報告は少なく、入学時から卒業までの変容をとらえたものはほとんど見られない。

本研究においては、1993年度に本短期大学部看護学科に入学した学生に、1回生時、3回生時、卒業時の3回にわたって東大式エゴグラムを用いた調査を行い、看護学生の自我状態の変容を検討した。

方 法

1993年度入学の本学部看護学科学生を対象に、在学中の3年間に計3回にわたって、東大式エゴグラム⁸⁾を実施した。

東大式エゴグラムは、個人の意識化されたレベルでのパーソナリティを、CP（批判的な親）、NP（養育的な親）、A（冷静で合理的な大人）、FC（自由気ままな子ども）、AC（順応している子ども）という5つの要素に分けてとらえるものであり、各要素の得点のrangeは0～20となっている。

検査時期は、1回目は1回生時の6月下旬～7月上旬（以下1回生時）、2回目は3回生時の成人・老人看護学実習（内科系）開始前（以下3回生時）、3回目は3回生の3月末（以下卒業時）である。実習は3回生の4月から12月までを通して、いくつかの実習セクションをローテーションするため、3回生時の調査は4月、6月、10月、11月の4回に分けて行った。4月に調査した者は、3回生実習にはじめて出る者であり、6月、10月、11月に調査した者は、いくつかの実習セクションをすでに終えていた。

1回生時は、「心理学」の授業のなかで、無

記名、集団式にて施行した。3回生時は、個人に直接配布し記名の上、回収した。卒業時は、自宅に郵送し記名の上、郵送にて回収した。回答があったのは、男性2人を除いた78人中、1回生時68人、3回生時76人、卒業時55人であった。

結 果

1. 1回生時、3回生時、卒業時のエゴグラム下位尺度の得点の変化（集団の比較）

1回生時のデータは無記名であったため、1回生時、3回生時、卒業時のエゴグラム下位尺度得点の変化は、集団の変化を検討した。エゴグラム下位尺度ごとに、1回生時、3回生時、卒業時の3群間で、一元配置分散分析を行い、主効果が認められた場合に Bonferroni の方法を用いて多重比較した。

結果を表1に示した。それをグラフにしたのが図1である。

CP スコアは、1回生時の得点 (10.52 ± 2.93 点) は、3回生時の得点 (7.41 ± 4.06 点)、卒業時の得点 (7.52 ± 3.72 点) に比し、有意に高かった ($P < 0.01$)。

FC スコアは、1回生時は 11.74 ± 3.69 点、3回生時は 12.96 ± 3.09 点、卒業時は 14.12 ± 3.71 点であった。卒業時の得点は、1回生時に比し、有意に高かった ($P < 0.01$)。1回生時と3回生時の得点に有意な差はなかった。

NP スコア、A スコア、および AC スコアでは、1回生時、3回生時、卒業時の間に有意な差はなかった。

2. 3回生時と卒業時のエゴグラム下位尺度の得点の変化と関連

1) 3回生時と卒業時のエゴグラム下位尺度の得点の変化（個人の得点の差の比較）

3回生時及び卒業時ともに記名の上回答のあった55人について、エゴグラム下位尺度ごとに、個人の得点の変化を対応のある t 検定を用いて検討した。

表2に結果を示した。それをグラフにしたのが図2である。

CP スコアおよび NP スコアでは, 3 回生時と卒業時で有意な差はなかった。A スコアは, 3 回生時は 9.45 ± 3.78 点, 卒業時は 10.91 ± 3.77 点であり, 卒業時の得点が, 3 回生時に比し, 有意に高かった ($P < 0.001$)。FC スコア

は, 3 回生時は 13.22 ± 3.07 点, 卒業時は 14.20 ± 3.80 点であり, 卒業時の得点が, 3 回生時に比し, 有意に高かった ($P < 0.01$)。AC スコアは, 3 回生時は 11.64 ± 4.47 点, 卒業時は 10.47 ± 5.05 点であり, 卒業時の得点が 3 回生時に比

表 1 1 回生時, 3 回生時, 卒業時のエゴグラム下位尺度の得点の比較

	CP	NP	A	FC	AC
1 回生時 (n=68)	10.52 ± 2.93	14.71 ± 3.35	11.24 ± 3.41	11.74 ± 3.69	11.71 ± 3.67
3 回生時 (n=76)	7.41 ± 4.06	14.33 ± 3.28	9.83 ± 3.69	12.96 ± 3.09	11.68 ± 4.39
卒業時 (n=55)	7.52 ± 3.72	14.55 ± 2.84	10.98 ± 3.82	14.12 ± 3.71	10.48 ± 4.94

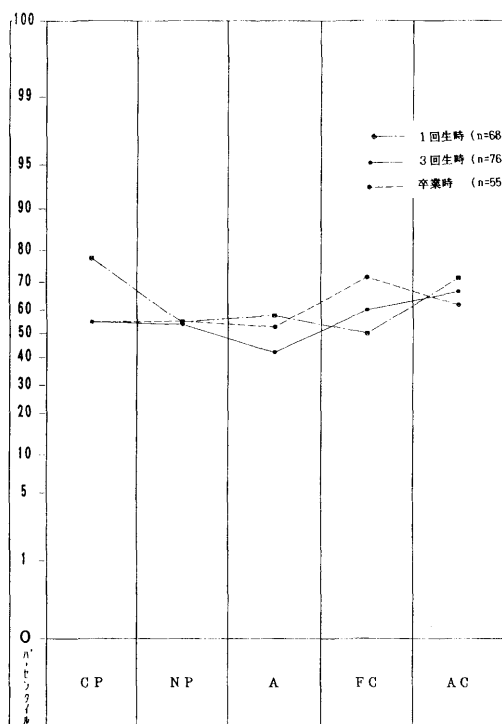
** $P < 0.01$

表 2 3 回生時と卒業時のエゴグラム下位尺度の得点の比較

	CP	NP	A	FC	AC
3 回生時	7.38 ± 3.74	14.16 ± 3.07	9.45 ± 3.78	13.22 ± 3.07	11.64 ± 4.47
卒業時	7.58 ± 3.73	14.51 ± 2.90	10.91 ± 3.77	14.20 ± 3.80	10.47 ± 5.05

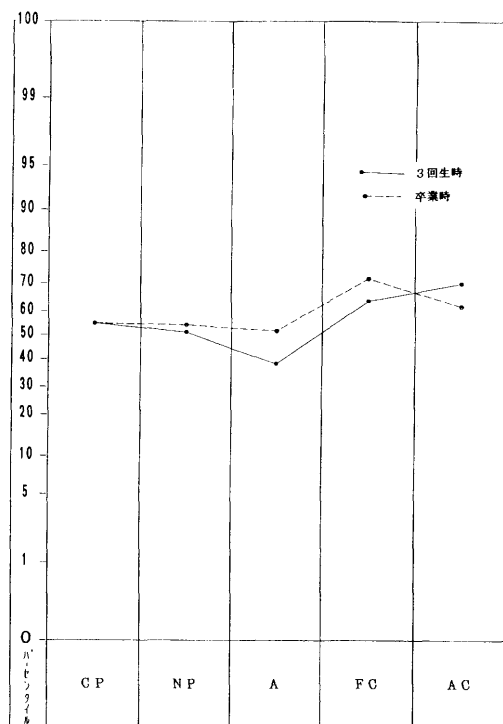
(n=55)

* $P < 0.05$ ** $P < 0.01$ *** $P < 0.001$



パーセンタイルは、標準化スケール (女性用) による**。

図 1 1 回生時, 3 回生時, 卒業時のエゴグラムプロフィール



パーセンタイルは、標準化スケール (女性用) による**。

図 2 3 回生時及び卒業時のエゴグラムプロフィール (n=55)

し、有意に低かった ($P<0.05$)。

2) 3 回生時と卒業時のエゴグラム下位尺度 得点の相関 (ピアソンの積率相関係数)

結果を表3に示した。全ての下位尺度で、3 回生時と卒業時の得点の間に有意な正の相関があった ($r=0.62\sim0.78$)。最も高い相関を示したのは FC スコアであった。

考 察

1. CP について

CP スコアは、1 回生時が3 回生時と卒業時に比し有意に高かった。3 回生時と卒業時の間には、有意な差はなかった。すなわち、CP スコアは3 回生時には下がり、卒業時にもそのレベルが維持されていた。

CP は、自他に対する批判的な厳しさを示すものであり、理想の追求という面がある。高かった1 回生時の CP スコアが、3 回生になると低くなるということは、教育の影響や生活の経験により、理想と現実が近づいたということなのであろうか。

今回の結果では、1 回生時の CP スコアは、10.52点であり、これまでの報告より高い。また、過去の本短大の看護学科学生の1 回生時の CP の得点も³⁾、1991年度は8.57点、1992年度は11.10点と年度間に差はあるものの、これまでの報告より高い。すなわち、看護学生の1 回生のエゴグラムの CP スコアは、吉武らによれば 7.46 ± 3.45 点であり⁵⁾、殿岡らによれば、9点である⁶⁾。また末松らによれば、一般女性の CP の平均値は、 7.85 ± 3.95 点であり、年代別にみると、10代は7点、20代は7.9点である⁹⁾。

表3 3 回生時と卒業時のエゴグラム
下位尺度得点の相関

CP	0.62***
NP	0.63***
A	0.70***
FC	0.78***
AC	0.65***

n=55

*** $P<0.01$

これまでの報告では、CP の得点に看護学生特有の傾向は示されていない。

1 回生時に高かった CP スコアは、3 回生になり、実習が開始されると、 7.41 ± 4.06 点に下がり、それが卒業時にも維持していた。これらの得点は、前述した先行研究の得点とほぼ一致している。さらに、2 回生時と3 回生時のエゴグラムの変化を比較した稲葉らの研究によれば⁷⁾、2 回生時は 5.38 ± 3.56 点、3 回生時は 5.08 ± 4.11 点と、得点は低いものの、学年が進行しても、得点に差はないとしており、今回と同様の傾向である。

我々は、本短大の学生の1 回生時のエゴグラムの特徴について、CP の得点は、看護学科、衛生技術学科、理学療法・作業療法学科の3 群による差はなかったと報告した³⁾。これらの結果を考え合わせると、1 回生時の CP の得点の高さが、本短大の学生の特徴である可能性がある。また、3 回生になると得点が低くなるということが、看護学生に特徴的なことなのか、今後の検討課題である。

2. NP について

NP スコアは、1 回生時、3 回生時、卒業時に有意な差はなかった。

NP は、受容的、共感的で世話好きな側面である。エゴグラムを創作したデュセイが NP 優位型を「看護婦長」とパターン化したように⁸⁾、看護婦にとって NP の高さは、一般に好ましいものととらえられている。

これまでの研究では、臨床実習で、患者へのケアを経験することによって、NP は上昇すると考えられている。稲葉ら⁷⁾も、NP スコアは、実習開始前の2 回生時と実習終了後の3 年生時では、14.80から16.05点に上昇したとしている^{5,9)}。臨床実習では、「何かしてあげたい」「患者さんの気持ちをわかりたい」という言葉が学生からたびたび聞かれる。実習によって、NP が上昇することは納得のいくことである。今回の結果では、入学時の NP スコアはこれまでの報告と同じ程度のレベルであったにもかかわらず、なぜ卒業時に NP スコアが上

がらなかったのでしょうか。一つ考えられることは調査時期である。卒業時の調査時期は、実習終了後3ヶ月を経過した時期であった。そのため実習によって上がった NP スコアの上昇をとらえられていない可能性がある。

3. Aについて

Aスコアは、1回生時、3回生時、卒業時で有意な差はなかったものの、3回生時が低くなる傾向があった。また、個人の変化をみると、3回生時は卒業時に比し有意に得点が低かった。

なぜ3回生時、すなわち臨床実習中にAスコアが低くなるのでしょうか。臨床実習では、知識と技術の統合が求められる。未知の経験が多く自分で判断をしなければならない局面に立たされる。自分で集めた情報をもとにアセスメントし計画を立て実践し、それを自分で評価しなければならない。指導者は論理性を要求する。このように臨床実習では、未熟な自己をつきつけられるため、冷静で合理的な判断力の自己認知が低くなっているのかもしれない。すでに報告したように、Aスコアの低さは、実習成績の低さと関連しており⁴⁾、臨床実習の指導では、Aを高めるような働きかけの必要があろう。

4. FC と AC について

FCスコアは、卒業時が、1回生時に比し、有意に高く、個人の変化では、卒業時が3回生時に比し有意に高かった。ACスコアは、1回生時、3回生時、卒業時で有意な差はなかったが、個人の変化をみると、卒業時は3回生時に比し有意に得点が低かった。すなわち、FCスコアは卒業時には高くなり、逆にACスコアは低くなる傾向があったといえよう。

末松らによると一般女性のFCスコアは12.32点で、10代では13.8点、20代では12.5点であり、一般女性のACスコアは9.87点で、10代では10.5点、20代では10.9点である⁹⁾。このデータと比較すると、FCスコアでは、1回生時及び3回生時はやや低く、卒業時はやや高い。ACスコアでは、1回生時及び3回生時は高く、卒業時はやや低い。

卒業時の調査時期は、進路が決まり、国家試験も終わった時期であった。拘束されることのない自由裁量できる時であったために、自由奔放な伸びやかさを表すFCスコアが高くなっていたのかもしれない。卒業時にACスコアが低くなることから、それが推定される。

FCスコアの高い学生はマイペースなために、臨床実習では指導者は要注意とみてしまいがちである。ところがその創造性が発揮されたとき、患者にとっても喜ばれるケアができる。ナースが驚くような、ユニークなケアの計画を立ててくる。本来学生が持っているFCの部分、すなわち直観的な感覚と創造性、豊かな表現力が看護に生かされるような指導をしていきたいと考えている。

結 論

1993年度に京都大学医療技術短期大学部看護学科に入学した学生のパーソナリティの変化について、東大式エゴグラムを用いて、1回生時、3回生時、卒業時の3回にわたって継続的に調査を行い、エゴグラム下位尺度得点ごとに検討した。

その結果、以下の特徴があった。1回生時に高かったCPスコアが学年の進行に伴い低くなる。NPスコアに変化はない。Aスコアは3回生時に低い傾向がある。卒業時にはFCスコアが高くなり、ACスコアは低くなる傾向がある。

これらの特徴について、主に臨床実習との関連について考察した。今後さらに、多面的に看護学生のパーソナリティを検討し、看護学生のパーソナリティの特徴をふまえた臨床実習のプログラムを立案していきたい。

謝辞

被検者として本調査に御協力下さった皆様に心より感謝いたします。

文 献

- 1) 菅 佐和子, 川井 浩: 医療技術短期大学生の

- パーソナリティと教育に関する研究—内田クレペリン精神検査と学業成績との関連性について—。京都大学医療技術短期大学部紀要別冊，健康人間学 1994：6，1-14
- 2) 内田宏美，任 和子，猿田裕子他：看護学科学学生のパーソナリティと教育に関する研究。京都大学医療技術短期大学部紀要別冊，健康人間学 1994：6，15-22
- 3) 菅 佐和子，任 和子，池本正生，浅川康吉，山根 寛：医療技術短期大学部学生のパーソナリティと教育に関する研究②—質問紙法性格検査を用いて—。京都大学医療技術短期大学部紀要別冊，健康人間学 1996：8，40-47
- 4) 豊田久美子，任 和子，中井義勝：エゴグラムからみた看護学生の自我状態と実習評価との関連。京都大学医療技術短期大学部紀要 1996：16，77-82
- 5) 吉武光世：女子学生の精神健康状態について。思春期学 1996：14(3)，335-340
- 6) 殿岡幸子，谷口興一，河野エイ他：医学生・看護学生におけるエゴグラムの検討。交流分析研究 1994：18(2)，53-58
- 7) 稲葉佳江，丸山知子：看護学生の性格特性と自我状態の変化。交流分析研究 1991：14(1・2)，9-16
- 8) 東京大学医学部心療内科編著：エゴグラム・パターン—TEG（東大式エゴグラム）による性格分析—。東京：金子書房，1995
- 9) 末松弘行，野村 忍，和田迪子：東大式エゴグラム TEG 手引き 第2版。東京：金子書房，1994